孩光叢

中村俊定文庫
文庫 18
143
2

宮城県立図書館

中村俊定文庫

その年に花知る丁ハいぬる海

如泉

まを　指折　風景乃　苞（ツト）　提要

嘉心月　廿　蹟　碁　泊る　ひさ　迫　我黒

をの〳〵　芝居　合　迫く　鞭石

此淀へ　あらき　ハ　ない　我る　舟　ろ　方山

うり　美の　羽織　てゝ　ろ　ひつ〳〵　桜　瞰

次題うゝむうふることごとき岑の月　晩山

吹矢よ嶺にあるとゝて来る　牧筆

那裏なる酒を家多と云とれて

志をいへて　傾城を　泣泉

来市の端とハ犯ふ名　とり石

うゝろ　紙よりて家敷　動ゞ方

茶ふを　針ふを　四壁光　狩ある　臨

人日を　茶まを　狩ふ　八丈　晩

池一つ　瀬をあるまゝ　ふ　軒を　方

茶　茶　茶　て　日　思　乃　頬　安

主　の　ふ　を　ぬ　て　戻　ま　ご　き　吹

嫁　ふ　を　摘　代　ま　る　ま　と　あ　不

悟　つ　ゝ　ば　と　書　ま　い　れ　を　か　し　多

と　う　次　梅　い　志　病　多　加　睦

金時を月の名に代へ
来るのもたつにまかる 雷矢 映
人別に人中のうぬぎちくも 腰
井戸へたをいが 叶 菴 の 瘧 方
暑い日い茅の輪くぐるを拾ひ 映
角入き角 拾て 足遠 ― 足 泉
盆借て 家 牛 房 ― 出 方

御乃香 ― 曲流乃 ― 寺 番
目出 ― 五人の ― 乳母 ― 人 石
笠法 ― 判 ― 墨 ― 映
家ふた ― 富 ― 歳 ― 足 泉
けば ― 絶 ― 足 石
出 ― 男の ― 髮 ― 映
配人て ― ひ乃 ― 退 ― 泉

欲乃を味たゝ〻て月日面白き声石
夜るの玉簾乃ゆゝ眠るゆゝ方
地動の後(ナイアト)如くゆゝ苔風瞰
海(ウミ)一時(ヨトシ)ゆゝ荒し日に鬼面
熱叱をゆゝ宗迄地を和泉
鈴鹿とゆゝ。無夫乃玄吸
世の中を深くゆゝて野路袋面

面凝て百姓ゆゝみゆゝて陸方
ひゆゝ世界のあゆゝに迄石
客ゆゝ乃ゆゝ生ゆゝて宿猛

吉柳を打て茅屋に京乃山　提要
雲乃尺そを　なの和花晩山
燕乃毎るを家い水絶て言水
草鞋　こゝまきて加る解肩文
大行る酒奈てゝ月の文執筆
毎つき茶碗と　薄月こゝ尺校瞰

ちゝゝと門田に瞰の蔵しを吸
腰獺　を　多の　打をけ　なる　函
宮毎よ　紅の　新乃ゝとて　浮苔
垂ゝ　ゝゝゝ　迎　ゝる　蔵翠
明鐵　ゝゝ　頭巾　ふ　男　文
根半を　せん　紀乃　的　を
硯箱乃　根を下る　花　瞰

弦句 井北　大江みち　井芹

ゝるゝに物の顯るゝ地ゝ翠
湖の樓に戴る　書　亀文
楊殘る何紅つゝる盃の月　象
殘る冥り　ゝい　さゝゝ　晩
海士乃男ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
縄暖簾の内のゆゝゝ　翠

そろそろ北四下ゝて　浪岡芩
浪ゝ川　かり　指乃　麦ゝ
思ふ夜ゝ好むゝ　ゝ　拾ゝ　翠
時雨乃傘い　翁遥　ゝ　晩
見まゝり　ゝ　例　二篇　ゝ　晩
新義の癖ゝ　文盃　ゝ　象
ゝゝ紀髮結婦ゝ　ゝ　晩

雲とまさまさか 何が為に翠

月入る宵の入る 漕茶船 文

坊主くさいを落とす 拭き

新の金つらひ 拾ふ 忘れ不吸

粉の肩乃いしれ 面 疲れ

年の寄るをかまえ寄せて 翁

罪をとり出れ 寄 乃 多智 文

神垣乃しろい花をかざす 翁

旅の乃い牧 月 日 遅うき 芳

勤文

苗代や 大百姓 小百姓

頬の袋をふくら 新雪 文 表

吹き出れ東風 釋ふ 此 吹く 協 之

孤月夜い　松原を周樹の
さんちりと乱る陰かき　門陰一切
豊く浸せる　二合半乃仮安良
奥の方に結ぶ紅蓮の矢表
まぶ蟬なり　敵ふ乃渡ア文
風荒く而退屈ふ　泊り舟の
石の縛を解り　春を乱之

迂遠なる祈宜文　彩む呪詛文　良
物ふ乱れ乱れ　行燈　消ス汽
彩虎や奥の見る　松梅良　文
夕月暑る　燈方　ゆん　亨　表
どさくさ　ひとりぬ紅の林之
森と云ふ　家面乃　金ふ
花の居縁　酒乃　市頃て　切

列枝(ワリバサミ)〻〻 沼(ヌ)に紅乃葉良
名(ナ)を義帆 枝をぐる人民 表
山の背に かゝる 小辰文
形(カタ)てり 村の秋乃延文乃
破(ワヤケ)好(キ)ハ 京乃 聲 男之
鳴る気 枕香 炉の香い消〻良
行寸 傳〻 家乃 和 言 物

なふそこふ牛 牽て行 菓(サウ)屋(ヤ)文
之志ま奴 革(カハ)の たひ中 表 表
之文里ハ田舎を物乃 毋(キウ)ゑて之
情が 仇(アダ)る 家 古を 踏 ふる良
名月を 蒲團をふる 虚労病(キヨラウヤミ) 乃
孤悲ゑと 人ゆふ 徳(オ) 簑(スキ) 文
村(ウ)の面 ゆ ちを きつ〻 壷 不 表

関の男や今日乃生霧之
樽板小巷の海さび古傘哉 良
我い何ぞ海を知 知 羽
かしまして花の尾を立てる 文
霧之巷行 三月乃そら 年

女乳や童に花を持る茎菜
麦搗(キネ)の地を雀の戸 晴山
カツスリと的矢外る素風(ユウ)濃く 小枝
徘徊や夫(トカ)に三ケ月 桃
る牛を山成る花を打撰 山
枝雪(キリ)をうん姫掛乗 素枝

真桃

步(ウ)行(ギヤウ)を止め門に入れば桃
辻占冥に面具捨てさぶらふ
焼苞の仮面の仮面こがれ髪焼
苓蔓(リヤウバン)喰ひ復を鞠に減ずる桃
元立し寄合接吻寄合
武蔵相模い国一色に焼
家鶏の声に鳥帽子乃人入れて桃

行き交ふる秋葵山こえ山
見渡す山月に通ふ遠り犬桃
悪霊注れ室の津葵盆桃
ふひ病ひ蔓(ツル)のくもの中陰山
冥ひ日うけよ茂(モクサ)葵ふれ桃

風や小流るゝのちゝ ぬま　素貞

手紙を菓 賣 呼 坊聲一 扇

新すゝき冥とまつげい松ゝゝ 文 次

寄会 人ふかれ一 ほふし 約 去

月を青いつくゝ拾ふ 紅乃 数 且 妙

二百十日を 新 世の中 点

ゆ 猶刈ゝ里い五の 表ゝ 扇

蝶(ナカマ)にや 奪 ゝん 扇 ゝゝ 次

かゝゝて彩ル 夜毎乃 片 拾 去

門の沖ゝ よ わろん 鴉(ツバメ) 加

明 五 新 元 ゝ 月あての星消ゝ 点

一 寄 よ せゝ ゝ 人 新 本 陳 扇

盃 茶 盃 地 獄 の 茶 ゝ あゝ ゝ 次

嵯峨おもふ　かぐむ月　うけ玄
松のゑや　[illegible]の庵乃肌きよ　如
ぐ[illegible]　奥ひ散　菜乃　香　負
日の七つ地　その英　[illegible]　玄
行を燕乃　徒事　[illegible]　仮
二湯先の　[illegible]と　燃　[illegible]　扇
文　役　立文　汚の　如

賀茂川や　[illegible]　流乃　燈　石　貞
源のとゝみ　[illegible]　琵琶　[illegible]　扇
天乙女　元に　[illegible]　[illegible]　仮
引　[illegible]　[illegible]　[illegible]　玄
沿一　[illegible]　[illegible]　[illegible]　如
我　[illegible]　[illegible]　[illegible]　如
眉目の　[illegible]　人　宝物　貞
[illegible]　扇

牛を[illegible]　志賀　亦　乃　色　次

金閣乃松　梢　月　高　真

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

獨りなる　窓の巖　庵　冷　玄

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　四　[illegible]　[illegible]　次

四門　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

幕　白　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

七尾一見の附添風彩具彩　晩山

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

祈ちゝ稚やんうしろ作つく勒文
曲舞い物の彼の小枝乃先を取
紙子 西 せん声をいそうし山
西行ものもつに参く置ふん文
書のもつを乃代官を教貞
ふくまゝ姫よ牧帳をゝまそて山
供を 葉鼻を拭ふ咱 ほの取

能道具 酒の角数多く貞
るゝ弼にゝ弦を 京 卜文
大川や又日乃面ゝ橋蔵て取
きりみ能も月光をて山
秘くと徒ゝ井の志賀の宝文
文をおこた厂乃来ゝ貞
傾城の老木の花ふく

雪の名残は孤舟に残る
雲あり起こり寒き夜
旅驛に仮くいぬる菜の花
我袖ふれ初しもの小徒
船問せいやや傾き嵐山
搖さ原圓妙寺心つる光の月
あらし嵐の陰に踏折る

必ずかこたるまじ
方たくて思ふさまなる
ぬる足を短き稲ふみ分る
庭掃いぬる人の一ふし
枕屏風のきさらぎの月
垢離よ清きる和泉乃海
秋風やあふけの生命

をちこちの松の色のあらそひ　貞

今川の清学寺にて　一智山

燭の光に常に隔りつゝ　安

ゆるされぬ行者の山の花垣　貞

小春よりつゝく年をかる　旅文

中秋の比三海一見　多日の家ふり　挑要

庶子宵戸より月に海つゝ八雲

吼本山

高野大師の旧跡を探ねよ

御しるしの筆乃行もぬかり

西まくを文字喰ぬくいろ紙

鷹堂

厂ゝ孫を妻子声ゝ一碧乃老

[illegible]の墓[illegible]

梶原をともにとのやの草[illegible]

惣持寺

枯[illegible]我を[illegible]似せんとや衾

能登八景

むかしの[illegible]

[illegible]

[illegible]山

帆[illegible]

松百

海の橋[illegible]

[illegible]女の目[illegible]

[illegible]崎

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

湯治

海中に温泉あり

かすまるゝ頃鯨うかゝ沖

猿石川岩瀬の落もまろく

面白の滝高城峠より 暮

古城

畠山氏いまだかゝる海辺の水一流の

文庫を家ホとやとおもひ

御山や今生駒山乃 嘉一川

女夫滝

嶮しく海雄志

長百滝の落る宅

織女は鶴しるを 女夫しま

蓬莱滝屏風滝

満蒐とゝ神出ゝ屏風岩

一宮御出

二月中申　七八里ヶ宮
箱根ゝ宮神樂

箱根ゝ宮を參詣　四出風

本文子
誕生十二日氏子神輿を舁ス

逗留ゝ一日ゝ　踊念佛

大板川　海目といひゝ寺ゝ

夕風や蛍ゝ中や　ゝ　ゝ　ゝ川

柏祭

旅いつこ柏ゝ柏ゝ　神供

柏祭

ゝ柏ゝ言ゝ　風神祭

故京を去ゝ　年ゝ　ゝ

かゝ　ゝ

ゝ　ゝ

いへ朋友のゝん　ゝ　ゝ別の白

ゝ　ゝ

ゝのとゝ

言葉

むり〜宗祇を古て海りきゝ
なやらせ〜をたゝるわゝ〜へ〜沈を
ちつゝそ

岩ゐを白へ宗祇乃皆茶

加陽
晴日の東ゆ〜てきょへ
香を老しは塩竈より梅の花

関川越え

白山や我片郡名ゐ〜へ

小松

笠と〜華一角〜人〜梅を梅雨し

金津
如月の寒ゆあて〜所行を稀い
の〜尾張を坪を
藤馬ちから詰〜れ老の言　女

月中

雪間氏なる人を好人と告げて
紅葉の色とりどりを出ぬる
難きを嘗なるみよ　花咲く　宿

中河内
洞道餘寒　経水雪ぬるゝや
笑しを地をひ出ぬる
うつゝしき庭おそ咲しや寄る出

ふゝ濱
濱風や春の郷　月を入れ

高山ゝ伊勢路をたゞゝ
神風や二人乗り　出雲る
鏡山
山嶺　松あれるやうゝ　續
京入

大坂

諏訪能登釜銘 并序

そもそも風雅とは花鳥の情に共感あるものの多く和らぎ人と用をなすに歌うたを情と資の具とするもあまり況んや人倫あるものの酒瓶茶釜の類ひとしきに歌ふ種とするまりとこれをその情に富むとなり。しかるに情を溺るる者多し。富いて況乃情を忘れ人欲をほしいままの假富と溺るる者多し。今此一釜都一鄙の人民銘ひ称ふる主鼎乃ちこれ世にたゝえ

其銘曰

花をと型にうつしやうば　才麿

墨を凝らく　黒き　浦山　提要

その日よりありはぐばらを卯　丸　提

あるべき　流る　沙二代　提要

幸吉乃家を篇に拾ふ。渭川

相嶌の御を加へ　女

紙人形をぶりに　要

扇をその花もそこ　其乃月　川

なる拙るとて　鋤　用ふ　女

改めた二字を　紙の文字　要

形むて　花を　川

五月雨衣裳の裾もぬるゝ　女

雨ふり　物日は　京を見ぬく　安

ぴつくと瓜をぬるゝ泊の牧川

寺の前　行は　絵を　松明　女

皆人寺参りのしるべの　銀袋　安

袋ゝゝゝゝ　てふを目のあれ川

うちあふく扇ゝ　あれ花の月　女

ゝゝも風さつ　つもくゝ　さん　嵩　安

表の西ゝ　ゝ　ゝる　笹じやと　猫のけく　川

火とり　灯　髪　髪　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　女

二尺八寸　意のゝつ　れ　吟　ゝ　ひ　安

風のみゝ　穂　笹　ゝ　ゝ　ゝ　川

中美がいつもの　ゝ　れ　藥　ゝ　女

長押ゝ　魚　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　鑓　西　安

夕霧乃ほとりに世をいとふ俺乃川
節の宴悦が孫乃そりはな女
小雨まい傘をさしは彩ひ安
椿乃ねぶりの極楽袈裟川
新なくへ江の波乃稲とえと女
あのくに川に海を家紙安
碎さもる程い極よりえを川

人のさげもで魂よ家紙女
浩くゝと石の多橋若もゝく安
足る波ゝくよ志ある明り稲川
千万い乾の先ぐれ手柄多女
嵐の吉に　おもる　胴背安
双六よ乃行花の紙きえ川
ちゝとかつてよあ業そろへる女

まるく〳〵我が屋とうを
穿〳〵まて〳〵花の笠

雲雪をいはぬ事也　笠乃也　ふる女

仮菓の節　乃さ〳〵と池のとう人　捉安

まる餐（キウ）のぐん卯　仮辰般　李坂

月見也八幡乃ふないつを成り　井千

茶碗　仮　ふる　彩　仮を　源子

山姥乃草鞋（ワラヂ）　拾ふ　ふるく　捉安

降をうしふる　世ようや桃の面　貴氏　貴玄

桃の仮　鶴と　何ふ　ふる家　昭別　有寛

何ふ　捉安　笠　笠を　呼ふ

仮菓の　ふる　の　花の　とふ

仮ふる　ふる　に　例　ふん　花ふ

うつ遠きにあそふの体を
訓みて其ことふつにふら
此彼の節を見まゐらせん
きられたる蹤のあまりて
しるせて

袖招乃花を人通を　恨みれ　江列大庸　東弥

東弥乃あるしとの故り旅
彼よ好みひつるよしきの訪
ふと花その芳韵を伝ふ
いまゝ今まくとくるあまりそり
にとあしみと桃及のまゐと

むかしは青く且いまは見あきれ
あしそこきやきあまんひらせさり
きるとゆうされみ志うらめん
ふ絡りとやうそ

まづ秋を　きらむ夜の闇　棕栗

追加

きほてしそ叢茂る人の纔月　言水

花ゆたふ　百里二百里　桃栗

[illegible]

酒好[illegible]色[illegible]我が内[illegible]

[illegible]と[illegible]て[illegible]同

枝[illegible]と[illegible]拙ぬ[illegible]名要

国[illegible]何[illegible]と[illegible]同

此[illegible]徒[illegible]

日の[illegible]

[illegible]

跋

能諧若得知音之面蓋而能達
大道者也答示欲飯器而雲孫
麓亦用之有以哉爰七月提要
好風雅遠訪庭花而一書数帛
乃寄其国器号能登金
一日初事而余依求勧[illegible]の後

鄧偉說云爾宵嘗嚮元祿年
夜明本
自
琴花堂
明山誌